

大原孫三郎の 社会・文化・福祉への貢献

大原 謙一郎



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、大原でございます。先ほど倉敷から着きましたが、今日は台風一過の気持ちのいい日ですね。列車からの景色も気持ちがよかったです。こちらのキャンパスに来ても本当に気持ちがいいですね。こんなところで研究する人は本当に幸せだなと思ひながら、今しばらく時を過ごさせていただきました。

ただ、私は実務の世界におりまして、アカデミックスではありません。実務の世界にいる人は、アカデミックスに対してだいたい二つの態度を取ります。一人は全く敬遠してしまう人、もう一人は畏怖してしまう人。私は畏怖のほうでして、今までのお話も伺っていると、本当に厳密な言葉づかいをなさる。それから、ちょっと間違った言葉づかいをしたら、すぐに突っ込んでこられるというので、誠に恐ろしい社会だと思っております。ただ私はその世界の間人ではございませんので、どうぞお手柔らかにお願い申し上げたいと思ひます。

この社会問題研究所は、このように素晴らしい形で法政大学さんにその理念を引き継いでいただいておりますが、実はこちらを一つのセンターとして、大原ネットワークというものを作っていただいております。これは、この研究所の他に労働科学研究所、それから農業研究所の後身であります岡山大学資源生物科学研究所（2010年7月現在、岡山大学資源植物科学研究所）、倉敷中央病院、それに大原美術館。言わば孫三郎がスタートさせました非営利で公益性の高い社会的な事業体のネットワークです。さらにその周辺にもいろいろな組織体がございますので、このネットワークがコアになって、いろいろなところに連携を広げていこうという形を取っておられます。

大原 謙一郎（おおはら・けんいちろう）

財団法人大原美術館 理事長

1940年 神戸市生まれ

1963年 東京大学経済学部卒業

1964年 エール大学大学院経済学部修士課程修了

1968年 同大学院同学部博士課程修了

1968年 倉敷レイヨン（現 クラレ）に入社

1982年 副社長として財務、総務、労務、経営管理、研究開発、などを担当

1990年 株式会社中国銀行に移り、1998年まで同行副頭取

現在、財団法人大原美術館理事長として財団法人の経営にあたるかわら、倉敷芸術科学大学客員教授として非営利事業経営論を講義。他に、倉敷商工会議所会頭、財団法人倉敷中央病院理事長、社団法人岡山県文化連盟会長等を兼ねる。著書「倉敷からはこう見える－世界と文化と地方について－」（山陽新聞社発行）倉敷市在住

今日もそういう関係で、ここに来させていただいているのですが、そういう社会的な機関と同時に、孫三郎が担った企業や会社もありまして、この二つが言わば両輪のようになって、いろいろなものを支えてきた。今朝の最後のところでもご質問を頂戴していましたが、一体どうやってそれを経済的に支えていたのだということとも絡みまして、言わばそういういろいろな社会的な事業をやってきた孫三郎と、ビジネスパーソンとしての孫三郎という、この2本立てで考えなければいけないかなと考えております。

ただ今日は、ビジネスパーソンとしてのことはあまり詳しく言う機会ではございませんので、もしかしたらあとのパネルディスカッションの時に、そういうご質問もあれば、少しは触れることもあるかもしれません。

ただ、ここで一つ忘れてはならないと思っていますのは、孫三郎はビジネスパーソンとしてかなり人道的経営者であったということです。例えば女工さんたちのいろいろな福祉を考え、そのために労働科学研究所を作って一生懸命に基本的な問題から考えようとした。同時にやはり経営者として、非常にクリエイティブで、イノベティブな経営者であつたらうと思います。そしてそうしたことは、總一郎についてもいえることだと思います。それだから、孫三郎も總一郎もどんどん新しいことにチャレンジしていった。本邦初演というのが、クラレも倉紡も大好きです。クラレでは、そういう本邦初演で、しかも本邦ナンバー1というビジネスが現在では非常に大きな収益の柱になっております。今日は会社の話をするわけではありませんが、ここに一緒に並んでおります大原美術館とかあるいは中央病院の中にも、そういうクリエイターあるいはイノベーターとしてのあり方は、非常に色濃く引き継がれていると思いますし、そのようなことが、私たちの理念的なバックグラウンドの一つかなということも感じておりますので、少し前置きとして申し上げさせていただきました。

その上で今日の話に入っていきます。

1. 2. 3. 4と項目立てしたレジюмеをお配りしています。1番目「美神の使徒と巖頭の獅子 倉敷に残る虎次郎・十次・孫三郎の話」。虎次郎というのは、児島虎次郎という絵描きです。大原孫三郎より1年下だったのですが、言わば同志でありました。そしてヨーロッパでいろいろ美術品を集めてきた。そして十次とは石井十次でして、孫三郎や虎次郎より少し兄貴分の社会事業家でした。孤児院の父、社会福祉の父と言われております。

児島虎次郎「和服を着たベルギーの少女」です [口絵参照]。児島はベルギーに留学をしました。ベルギーは、今ECの本部がありますが小さな国です。しかし美術の世界では、フランドルの中心地ですから決してマイナーな国ではありません。そういうところで、児島虎次郎は勉強しながら、ベルギーの少女に和服を着せて、こういう絵を描いた。

大原美術館は、江戸時代の町並みを残す倉敷の町の中で、西洋などの優れた作品を見ていただいております。ですから、美術館の内と外、洋の東西をつなぐ作品として、美術館に入った最初の場所にこの作品を飾っています。

児島虎次郎は、ヨーロッパに3回行って勉強してきましたが、実は中国、朝鮮半島にも4回行ってきます。ヨーロッパでいろいろなことを吸収してきて、それをもう一度アジアを旅することによって、自分の中に定着させ、そして自分の仕事に戻って行く。そういうことをした人です。そう

いう意味で、日本と世界との架け橋である児島を象徴する作品として、これをいつも美術館でご覧いただく最初の作品としているわけです。

こういう作品を描いた、いわば美神の使徒ミュージズが児島だとすれば、石井十次が獅子の子落としです。

獅子の子落としというの、この絵です [口絵参照]。天辺にライオンがいますね。ライオンが谷底を見下ろしています。その下のほうの岩のところにライオンの子どもが二匹います。つまり、ライオンは子どもを千尋の谷に突き落として、上がって来るのを待っていたという伝説を絵にしたものです。

石井十次先生は、孤児院で受け入れた子どもたちを甘やかしてご飯を食べさせることをやっていただけではありません。自分がやっているのは養育ではない、教育だということを言っておられます。それゆえ、この崖の上にいる獅子の姿は、ある意味で石井十次先生の姿かと。非常にごつい迫力のある社会事業家だったという方です。

この、非常に真面目な絵描きであった児島虎次郎と、迫力のある社会事業家であった石井十次先生と、少しやんちゃな経営者であった大原孫三郎。この3人の組み合わせの中からはいろいろなものが出てきました。そしてそれが、このような形で倉敷に残っているということを通じてご紹介いたします。

石井十次は迫力のある社会事業家と申しあげました。この人は資金集めのために、例えば子ども達と楽隊を組んで日本中を旅します。そういうことで少し新聞に名前が出たりすると、たちまちやっかむ人がいまして、「石井十次という男は、孤児たちを食い物にして、自分の売名行為をやっている。銭儲けをやっている」というようなことを言われました。この人は平気の平左で、「そういうことを言ってくれても平気だ。わしが売名行為と言われることによって、一人でも二人でも孤児が救われるならば、わしは本望だ」と言って、異議も返さなかったという人です。相当ごつい社会事業家であり、キリスト者です。

その石井十次先生の孤児院の写真ですが、当時は戦災や飢饉が続いたため孤児たちをこんなにたくさん集めていました。実は今も、九州の宮崎で孤児院をやっています。今はただ親を亡くしただけでなく、親から教育あるいは養育を放棄された、もっと深い虐待を受けてきた子どもたちがいます。そういう子どもたちを今一生懸命、九州の地で養育教育しています。

孫三郎は、石井十次への共感からこの孤児院を支援しました。先ほどのお話の中で、孫三郎が始めたことでつぶれたものはないというお話がございましたが、この社会事業も今も連綿として続いているわけです。

細長い絵が掛かっているのをご覧いただけますでしょうか。あれが、さっきご覧いただいた、獅子が千尋の谷に子どもを突き落とす絵です。その前で、石井本人は「密室対面教育」と言っていますが、子どもたちを一人ずつ呼び出して、二人きりで対面で話をすることによって教育していく。後ろに日本地図と世界地図の両方出ているのをご覧いただけますか。こういう形で、世界につながる子どもたちの心を育てるということをやりながら、教育をしていたのが石井十次先生でした。

その石井十次の孤児院で描き上げた児島虎次郎の代表作が「情けの庭」です。この作品は1907年に東京府勧業博覧会美術展で一等賞になり、時の皇后陛下がお買い上げになって現在では宮内庁三

の丸尚蔵館にあります。続いて児島の作品「里の水車」。こういう形で、人々の生活をじっくり見つめる眼差しを持った児島という絵描きが、ヨーロッパに行ったら「和服を着たベルギーの少女」のように、とても明るい作品を描くようになります。だけど、その作品でも一人ひとりの人間の生活をじっと見つめる視線は、変わらずに感じていただけたと思います。生活の中の一つの情愛あふれる断面を切り取るような心を持った画家が、児島なのです。その児島の奥さんになったのが、実は石井十次の娘さんです。そういう形で、福祉の心と美術の心がここで結びつきます。

続いて若竹の園という保育園を紹介します。この園舎を設計されたのは西村伊作先生です。さきほど大原孫三郎の残した事業がどうして生き残ったのかという一つの理由として、いい加減な妥協ではなく、無理をしてもいいから最高のものを提供することに非常にこだわったからだ、というお話がございました。それを聞きながら、実はこれを思い出していたのですが、保育園ながら西村伊作の手になるきれいな建物ですよ。

そして、次が倉敷中央病院です。今に至っては大規模な拡張や改修もなされていますが、設立当時は建物としたら、まあ普通の大きさの病院です。しかしここでも東洋一の医療を提供するということで、大原孫三郎は当時の医学界のトップレベルの方を京都大学からたくさん呼んで来られました。ここでも、妥協せずに最高のものを提供していくという姿勢は変わっておりません。ただ、それを万人に分け隔てなく提供していくという思想が、非常に強くございました。

そして孫三郎の始めたもう一つの事業が大原美術館です。この中身についていろいろ言っていきますと切りがありませんので、足早に見ていただきます。

〔スライド〕「和服を着たベルギーの少女」が入口に飾られた姿です。

〔スライド〕2階のメインの展示室の姿です。展示室の一番奥側に窓があります。

〔スライド〕窓の外を見ていただきますと、日本の江戸時代の伝統的な家並みが見えます。そして振り返ると西洋の優れた美術が展示されているわけです。エル・グレコ「受胎告知」。モネ。ゴッガン。ゴッガンの回顧展がある時には、必ず出してくれと言われて、嫌だ嫌だと逃げ回っている作品ですが、ついにこの間は東京で、ボストン美術館の大作が出た時に、しょうがないから出さされました。続いては20世紀の部屋に入っていきます。ピカソ。モディリアアーニ。・・・はい、次に行きましょう。

〔スライド〕そして第二次世界大戦後から現代。ポロックにジャスパー・ジョーンズ。

今、大原美術館では年間延べ3000人を超す幼稚園、保育園へ通う子どもたちが来館しているいろいろなプログラムを行っていますが、彼らはこういう抽象的な作品にも非常に興味を持ってきています。この間、ある私の友人に息子さんが二人いまして、そのうちの一人はフォンタナというイタリアの現代作家の画面をパーっと切り裂いたような作品の絵葉書をたくさん持って帰りました。

〔スライド〕日本の近代から現代の作品もあります。これは安井曾太郎の「外房風景」、千葉県海岸風景ですね。まさに日本の風景。そして小出楯重。一生懸命に油絵を描いているけれども、決して西洋人の真似をしているわけではない。日本人である自分の独自の世界を作っている。しかし良く見ると画面の右隅の下の方に本がありますね。ホルバインの画集です。「わしは日本人だ。だけど心は世界に開かれている」というようなところが、ここにも表れていると思いますが、そういう絵描きたちが私たちは好きです。

〔スライド〕大原美術館では、現代のアーティストの展覧会や若手が思い切って作品を描けるようなレジデンスもやっています。こういう形で、現代のいろいろな人たちのチャレンジ、さっき言いましたイノベティブなところに、私たちも突っ込んで行っています。

〔スライド〕真ん中におられるのは、柳宗悦さんです。向こうは河井寛次郎、こちら側は安井曾太郎に梅原龍三郎。この柳宗悦先生と仲間たち。他にも益子の巨人濱田庄司さん、色と形の魔術師、万能の天才芹沢銈介さん、そして棟方志功さん。この人たちが「美術というのは美しい。生活も美しい。美術と生活の美しさをつなぎ合わせるのが、美しい生活の提案だ。美しい生活の提案がこれだ」という主張を様々なやり方で見せてくれました。そして、この人たちを私たちは非常に大事にしています。これも孫三郎の一つの精神のあり方だと思います。

〔スライド〕大原美術館の建物のひとつに、こういうところがあります。江戸時代の米蔵を改造した展示室ですが、これが濱田庄司先生の部屋です。ここから一部屋ごとに、バーナード・リーチ、富本憲吉、河井寛次郎と続きます。このようなものの中に、いろいろな意味で日本の心がこもっていて、しかもこれが生活の場に（今は値段が高いですからなかなか生活には使いにくいですが）はまってくるものだということを主張していた人たちです。

またこの展示棟の内外装は芹沢銈介先生が手がけられました。

〔スライド〕それから、津軽の熱き心、棟方志功です。この作品は何かと言いますと、倉敷の大原の家の襖に棟方が落書きしていったものです。かわいいでしょう。こういう形で、芸術作品としてよりも、生活の中の一つのシーンとして、こういうものを作ってくれる。

〔スライド〕これは棟方の代表作の一つでしょうね。馬が駆けています。それから、その上に狩人が乗って、弓矢を構えている。空には鳥が飛んでいる。地には獣が這っている。けども、見てください。棟方本人が言っています。狩人は手に弓を持っていない。矢もつがえていない。弓矢で獣や鳥を狩るのではなく、心で花を狩ってくださいと。心で花を狩ってくださいというと、すぐ思いつくのはベトナム反戦運動の頃ですけれども、これが描かれたのは昭和20年代の末ですから、ベトナム戦争の頃ではありません。強いて言えば、朝鮮戦争の頃かな。

棟方というのは、いわゆる社会派アーティストではありません。

こちらの社会問題研究所には、日本の労働運動の軌跡を語るすばらしいポスターがずい分あって、先ほどうちの学芸課長が言ったのを聞いてびっくりしたのですが、ロシア・アバンギャルドの最先端のデザインがそうしたポスターに出てくるそうですね。そのようなことをやっている方たちが片方にいたのですが、棟方は決してそういう社会派ではありません。しかし、アーティストの心の中には何かその頃、これからの社会を見通すものがあつたのかなと。そういうところを私たちはしっかりと見ていきたいと思います。

そういう形で、言わばアートと生活そして社会福祉が一つのものにまとまってくる。そのようなことを実現しようとしてきたのが大原美術館である、ということです。

〔スライド〕もう一つ言いますと、これは倉敷民藝館です。

生活の中に美しいものがある、美しい生活のあり方の提案をやっているとする、もう一つの提案のあり方が日本民藝館であり倉敷民藝館です。こういうものも、大原孫三郎の視野の中に入っていました。東京駒場の日本民藝館の建設資金は孫三郎が提供したものです。

それと同時に、ここでちょっと誤解してはまずいのですが、だからといって、そういう分野にまっしぐらに突っ込んでいった人かというところでもない。ここも一つの謎を残すところかもしれませんが、こういうものと逆のほうの対極にあった、例えば裏千家さんとかの世界にもかなり深く、孫三郎は頭を突っ込んでいます。

昭和13年に京都で北野茶会というものがありました。これは秀吉の茶会を再現したものなのですが、そこに何人かの富豪が席を出しているのです。富豪というのはおかしいですね。益田鈍翁など数寄者と行ったほうがよいですね。そうした数寄者の中に大原三楽庵というのも席を出しています。孫三郎です。

ですから、あまり一筋縄ではいかない人だということが、そういうことでも少し気がついていただければと思います。

〔スライド〕こうした生活の質を向上させるための美術のあり方を、今日では様々な形で追求しています。たとえば、そういう心を子どもたちに伝えようということで、私たちは一生懸命がんばってやっています。先ほどお話ししたように幼稚園や保育園の子どもたちがたくさん来て美術館でのレッスンの時を過ごします。またチルドレンズ・アート・ミュージアムといって、大人も子どもも一緒になって美術館全体を使って様々なワークショップを行う企画もあります。

そういうことが倉敷では展開されている、ということをご覧いただきました。紙芝居はここまでです。

このような形で、私たちが倉敷で活動していく時に、何を考えているかということをし少し最後に申し上げさせていただきたいと思います。これはやはり、大原孫三郎あるいは總一郎が今まで仕事の中でずっとやってきたことと、かなりつながってくるのだらうと思います。

というのは、私が本当にアカデミックスの人だったら言いませんが、よくわからないけれども、もしかしてそうだったかなと思うことがあります。

さきほど児島虎次郎は、ヨーロッパに3回行って中国に4回行ったと言いました。実はその中で、ヨーロッパではあのような美術をしっかり勉強しましたし、ヨーロッパの心の本音と言いましょか、奥底と言いましょか、それを探るためにエジプトに行っています。日本の心の奥底を探るために中国とか半島美術に触れてきたということも、その通りであった。

しかし、そうではあるけれども、もしかしてそれと同時に、児島という人は非常に鋭い社会ウォッチャーだったのではないか。ということで、大原孫三郎は、児島に美術を勉強すると同時に、ヨーロッパの社会を見ろ、中国の社会を見ろということも使命として与えていたのではないか。

現在、児島から大原孫三郎に宛てた手紙を読みおこしています。それが全部できたら、これは明らかになってくるのではないかと思います。そういう形で、言わば美術あるいは芸術というものを社会から遊離したものとは、たぶん孫三郎も總一郎も捉えていなかった。だからと言って、最初に書きました「美神の人である。ミューズの人である」ということの価値を低めていたわけでは、決してありません。しかし、そういったつながりを考えていたかなということの一つのつながりのようなもので、私たちは今何を考えているかと言いますと、それが最後です。「文化と福祉と世界に広がるメッセージ」という4番目のところです。

私たちは、美術も医療も福祉も、目の前にいる人たちを一生懸命幸せにしてあげる。あるいは美

しいものに接することによって、少しでも一人ひとりの人生を豊かにしていく。そのことはものすごく大事なことだと思っています。そのことの価値を少しも低いとは思っていません。

それと同時に私たちは、クリエイターでありイノベーターであるという孫三郎・総一郎のハートは、美術館とか、あるいは病院の活動の中でも、決して失ってはいけないと思っています。そういう意味で、新しいクリエイションに対する支援ですとか、あるいは新しい医療の世界に対するチャレンジですとか、あるいは新しいマネジメントに対するチャレンジといったことも、常に加えていきたいと思っている。

そういう意味で、私たちは、文化あるいは福祉は人生のクオリティに対して、あるいはクリエイションのクオリティに対して、少しおこがましいことを言うかもしれませんが、「人生のクオリティをあなたが高めるために、美術の絵を見なさい」とは私たちは言いません。ただ、一人ひとりの方がクオリティを高めていただくチャンスを得ていただくための場合は、提供しましょうと。質のよい場は提供しましょうというのが、私たちの美術館の考え方です。

病院においても、たぶんそうだろうと思います。偉い先生方が、お前らの病気を治してやるよという姿勢では、絶対に病気とは闘えません。そうではなく、患者さん一人ひとりが病気と闘って治していく、それを私たちはお手伝いしますというのが、倉敷中央病院の基本的な理念であるだろうと、のちほど病院のほうからも話があると思いますが、考えています。

そういう形で、人生のクオリティに対してプラスになる、一人ひとりがよりクオリティの高い人生、自分なりに考えるクオリティの高い人生を送っていただくアシストができる、そのような場を提供していくということを、私たちは中央病院でも、あるいは美術館でも考えています。それと同時に、そういうクリエイションのための、クリエイションのクオリティを高める場も提供しようということで、例えば美術館では若いアーティストたちに制作を依頼する。あるいは若いアーティストたちにレジデンスに来てもらって、仕事をしてもらう。そういうことをやっています。そのように、片方に生活とクリエイションのクオリティを高めるということがあって、もう片方に、やはり社会に対する働きかけというのが美術館にもあるかなと考えています。

ここで誤解していけないのは、いわゆるプロレタリアートとか、そういうことを考えているわけではありません。もちろん、それは意味がないというわけではなくて、ここは社会問題研究所ですから一つ申し上げますと、私たちのところには、前田寛治という絵描きがプロレタリアートに感化されて描いた作品があります。労働者が二人椅子に座っているのですが、上のほうに赤いローマ字でスローガンが書いてあります。「労働者階級は自覚す。我らは不合理なるように生存を強いられていることを」。

実は、この赤い字の書き込みは消されていました。塗りつぶされていたのです。それが修復した時に分かったので、「塗りつぶされたということも史実であるし、書いたことも史実であるし、どちらがより……」と考えた上で、今は文字が見えるように出しています。

そういうアートがあるということは、もちろん否定しないわけだし、それを私たちは非常に価値あるものとして出しています。けれども、ただ私たちが社会に対する働きかけと言っているのは、そういう言わば形ではありません。そうではなく、二つ大きなことがあるだろうと。

一つは、今の世界というのは、文化と文化の誤解と摩擦がものすごくたくさん悲劇を呼んでいる

であろう。もっとわかり合うことができるのではないだろうか。これは私が言い出したことでも、大原美術館が言い出したことでも何でもありませんで、20世紀が終わろうとしている2000年に、アメリカのアспен研究所というロッキー山脈の中にある研究所の50周年（今日ここは90周年ですが）のシンポジウムがあった時、グローバリゼーションについてのディスカッションがありました。

とてもおもしろかったのは、グローバリゼーションをディスカッションして、例えば世界の法による支配といったアメリカ流のロジックを出し、これがいいのか悪いのかということ、これはアメリカの懐の深いところだと思うのですが、かなり反米的な方もそこに来て発言をしておられました。とても生臭いディスカッションだったのですが、申し上げたいのは、そのいくつかのセッションの一番最初が宗教のセッションでした。そして一番最後が文化のセッションだったのです。

そして、そういう生臭い話をいろいろした最後に、民族によって例えば美しいと思うもの、尊いと思うもの、醜いと思うもの、避けなければいけないと思うもの、それぞれ違うよねと。そういうことをお互いにわかり合うことが、これから21世紀にはとても大事だねということディスカッションしました。壇上に上がっていたのは、そういうシンポジウムですけれども、ビジネスパーソンでも政治家でも何でもなく、ハーバード大学の美学の先生でカリーさんとおっしゃいました。あるいは、ナショナルギャラリーの前の館長さんのブラウンさん、そういう方々でした。

そういう形で、文化というものは、21世紀の世界に対して何かインパクトを与えていなくてはいけないのではないかということです。それゆえ、私たちの美術館は多文化理解の装置である、多くの文化を理解する装置であると自己規定をしています。

文化がお互いにわかり合えれば、平和な世界が来るなんて、そんな甘いものではないことはよくわかっているので、そういったことが来る前に、私たち日本人の心はこうですよということも世界にアピールしたい。先ほど見ていただいたスライドの中にも、そういう気持ちはたぶん表れていたと思いますが、日本の心をアピールすると同時に、多文化理解の装置として働きたい。

このようなことを今私たちが思っているのも、例えば社会問題研究所さんですとか、労働科学研究所さんですとか、あるいはクラレ・倉紡ですとか、あるいは中央病院さんですとか、そのような兄弟事業たちと一つのつながる理念があるからかなと。それを意識しながら、私たちは考えているのかなという気も、一ついたします。

最後に一つだけエピソードを申し上げますと、文化は万能ではない。しかし無力でもない私たちは考えています。矢代幸雄先生という明治生まれの世界的な美術史家がありました。ポッティチェリというルネッサンスの絵描きの研究で、世界に名をはせた先生でした。この方が昭和13年にボストンにおられた。13年というのは満州事変の真只中で、アメリカの対日感情が非常に悪かった頃です。町を歩いていても、「ジャップが行くよ」とか言われていた頃です。ですから矢代先生は、町を歩くのもとてもつらかったと書いておられます。

だけど、その時にボストン美術館で、吉備真備が唐に行った時の絵巻物「吉備大臣入唐絵巻」が展示された。矢代先生は、「東洋の猿みたいな黄色い奴が変なものを作りやがった」と皆に馬鹿にされるのではないかと思って、とても心配しながら見に行ったら、それを見に来ていたアメリカの人たちが「なんと、すばらしいのだ。この表現力は何なのだ。この色彩は何なのだ」と非常に歓迎してくれていた。

それを見て矢代先生は、「ここに横たわっている一巻の絵巻物が、ただ横たわっているだけで、何人も日本の友だちをアメリカに作ってくれていることに、胸が熱くなった」ということを書いておられます。その時に日本の友だちになってくれた人たちは、残念ながらあの戦を止めるほどの力はなかったかもしれない。けど少なくとも、そういう友人たちが、京都や奈良が破壊されるのを止めてくれた。それくらいの力はたぶんあったのだろうと。

私たちは、文化も美術も、そして医療も学問も万能ではないと思いますけれども、無力でもないと思っています。そういう気持ちで、倉敷で一生懸命がんばっている、言わば大原ネットワークの兄弟事業が一つあるということもご理解いただきたいと思っています。そして、そういった活動から、これから明日へ私たちの歩みが何か参考にできればと考えております。どうぞご清聴ありがとうございました。

(おおはら・けんいちろう 大原美術館理事長)

法律文化社

〒603-8053 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71 ●価格は定価(税込)
TEL 075 (791) 7131 FAX 075 (721) 8400 <http://www.hou-bun.co.jp/>

新自由主義批判の再構築

赤堀正成・岩佐卓也 編著

●四六判／304頁／3150円

●企業社会・開発主義・福祉国家 今日の新自由主義批判論は混乱している。三つのキーワードを軸に実証的・理論的な解明を通し、その本質を見極める。新自由主義に対抗する課題と主体・運動を考える場を提供。

序章 新自由主義批判の再構築のために「赤堀正成」

第Ⅰ部 新自由主義と企業社会 新自由主義改革と「野蛮な労働市場」―木下武男「日本人の賃金」の検討(赤堀)／日本の経営は解体したのか?「新時代の「本」の経営」における構想と実践(赤堀)／格差問題を逆手にした「労働ビッグバン」推進論―八代尚宏氏の主張を読み解く(岩佐)／男女賃金差別と年功賃金―森ます美「日本の性差別賃金」の検討(岩佐)／首切り容易な社会の方が労働者は幸せ?―脱格差の名のもとに解雇自由化を唱える「労働ビッグバン論」(平井浩郎)

第Ⅱ部 開発主義と福祉国家 日本における新自由主義の性格規定について(岩佐)／官僚主導国家観のたいなる幻想―日本は「開発主義国家」か?〔菊池信輝〕／開発主義論と新自由主義との政治的親和性―「情況」新田論文の教訓(森田成也)／新自由主義に対抗する福祉国家論の条件―生存権原理の再構築(兵頭淳史)

人口・家族・生命と社会政策

杉田菜穂 著 ●日本の経験

●A5判／292頁／5880円

戦前日本の少子化論を掘りおこし、そのうえで児童政策や優生政策など社会政策論の系譜を整理、再構築を試みる。現代的な議論に新たな角度からの問題提起となる一冊。

序章 課題と方法

第Ⅰ部 人口論と社会政策 少子化問題と社会政策―ミユルゲルと高田保馬

／人口問題と社会政策論―米田庄太郎と海野幸徳／社会学系社会政策論の展開―戸田貞三の所説を中心に

第Ⅱ部 人口問題と児童政策 人口問題と児童対策―1920年代の状況を中心

に／児童権論の展開と社会政策―1933年児童虐待防止法を見据えて／戦前における感化事業の到達点―少年教護法をめぐって

第Ⅲ部 人口問題と社会政策 社会学から厚生学の提唱へ―統・海野幸徳

論／人口政策論の水脈を求めて―永井亨の人と思想／永井亨と新生活運動終章 出生政策と家族政策―史的回顧